

攻撃性と自尊感情および愛着スタイルとの関連

小寺 健太*・桂田恵美子**

抄録：本研究の目的は、攻撃性と自尊感情、現在・過去の愛着スタイルの関連を検討するとともに、愛着対象者間の愛着スタイルの一致度について検討することであった。大学生を対象とした質問紙調査の結果、攻撃性と自尊感情との関連について、自尊感情が低いほど敵意、短気は高くなることが示された。この結果から、自尊感情の低さによって生じる欲求不満や否定的な気分が攻撃性を促進する可能性が示唆された。また、現在・過去の愛着スタイル間の関連について、過去の愛着スタイルが安定している方が、現在の愛着スタイルも安定していることが示された。この結果から、大学生の場合、親と一般他者という愛着対象の異なる愛着スタイル間で、それぞれの愛着スタイルはある程度一致することが明らかとなった。攻撃性と現在・過去の愛着スタイルとの関連について、幼少期の愛着よりも成人期の愛着の方が影響力は大きいという推測は概ね支持された。

キーワード：攻撃性、自尊感情、愛着スタイル

近年、私たちが日常生活で利用する公共の場における攻撃的な問題行動が、テレビや新聞などのメディアを通して頻繁に報じられている。残念ながら、「暴力は犯罪です」と訴えるポスターが必要なほどに、現代社会において攻撃性は身近なものとなってしまっているのだ。しかし、メディアで語られるその攻撃行動や動機は、多くの人にとって理解しがたいものが多い。心理学においても、人はなぜ攻撃するのかを明らかにするために、攻撃性に関する多くの研究が行われてきた。

そもそも攻撃性とは何か。岡田・桂田（2013）は先行研究から、攻撃的な反応（身体的、心理的苦痛を他者に与える行為やそれを目論んでいる内的状態）を、他者や出来事に対して示す傾向として攻撃性を説明している。また、これまでの研究によって攻撃性が複合的な特性として捉えられていることから、それらがどのような要因と深く関連しているかを追究することが攻撃性をより明らかにすることにつながると指摘している。

攻撃性は多くの先行研究で性差があることが明らかになっている。攻撃性の一般的傾向を測定する尺度を作成した秦（1990）も、攻撃性の性差について検討している。その結果、攻撃性総得点と身体的暴力のような直接的に表出される攻撃性は女性よりも男性の方が有意に高いが、表面に現れないiraだちは男性よりも女性の方が有意に高く、言語的攻撃と敵意については有意差が見られなかったと報告している。

このような攻撃性について検討した主要な研究の1つに、愛着スタイルとの関連を扱ったものが挙げられる。

一般的な愛着理論では、乳幼児期に形成された養育者との愛着を基に、自分の行動に対応する愛着対象者の行動パターンを予測する内的作業モデル（internal working model）が形成され、この内的作業モデルはその後の対人関係に大きな影響力を持つとされている（加藤、1998）。この理論に基づいて、愛着スタイルと攻撃性との関連について検討する研究は数多い。

尾崎・杉本（2007）は、青年期における愛着スタイルと攻撃性との関連についての研究を行った。この研究では、愛着スタイルは詫摩・戸田（1988）の成人版愛着スタイル尺度で測定され、安定型、両価型、回避型の3つに分類された。その結果、安定型は攻撃性が低く、両価型と回避型はきっかけがあれば激しい攻撃性を表出する傾向があることが示された。

同様の研究に工藤（2006）が挙げられるが、愛着スタイルは、加藤（1998）が海外で開発されたものを邦訳した、愛着スタイル尺度（Relationship Questionnaire：以後RQ）で測定され、安定型、拒絶型、とらわれ型、おそれ型の4つに分類された。工藤はおそれ型の特徴として、愛情の撤去を忌避して攻撃性を抑圧するが、他者との関係が危機的になり自己の防衛が破綻の脅威にさらされると、制御不能な激しい攻撃性を表出する傾向が窺えると報告している。しかし、この工藤の研究では他の愛着スタイルについては攻撃性との関連が見られなかった。この結果について工藤は、攻撃性の測定に用いたP-Fスタディは測定水準が潜在的なものであり、そのおかげで抑圧という特徴を持つおそれ型の攻撃性は測定す

*関西学院大学文学部4年

**関西学院大学文学部教授

ることができたが、他の愛着スタイルと関連が見られなかったことについては、P-F スタディが測定する攻撃性は、必ずしも愛着理論で説明するものではないことが反映されていると説明している。

工藤 (2006) が使用した RQ (加藤, 1998) は、自己観 (自分は他者に、特に愛着対象によって援助的に対応してもらえよう人間か) と他者観 (他者は求められた援助や保護に対し、すぐに対応してくれるような人間か) という、内的作業モデルの 2 つの次元を提唱した愛着理論を基に、それぞれがポジティブかネガティブかという組み合わせによって愛着スタイルを 4 つに分類する。加藤 (1998) は作成した RQ の妥当性の検討のために、自尊感情が自己観を反映すると考え、自尊感情と RQ で分類した 4 つの愛着スタイルとの関連について検討した。その結果、自己観がポジティブな安定型と拒絶型は、自己観がネガティブなとらわれ型とおそれ型よりも、有意に自尊感情が高いことを報告している。

自尊感情は抑うつや精神的健康のように適応の指標として用いられるものであり、愛着を扱った研究でも頻繁に取り上げられている (島, 2014)。島 (2014) は、親の養育態度と子どもの社会的適応との関連について愛着理論の観点から明らかにするために、内的作業モデルにおける自己観を関係に対する「不安」として、他者観を関係からの「回避」として捉え、不安、回避と自尊感情との関連について検討した。その結果、不安、回避ともに高いほど自尊感情が低いことが示された。つまり、自己観、他者観ともに低いほど自尊感情が低くなることが明らかとなった。

愛着スタイルと自尊感情との関連について検討した今野・吉川 (2016) の研究では、安定型と自尊感情との間に正の相関が、両価型、回避型と自尊感情との間に負の相関が示された。これは島 (2014) と一致する結果である。

以上の先行研究により、愛着スタイルと攻撃性、愛着スタイルと自尊感情には関連があることが明らかになっていることから、攻撃性と自尊感情にも関連があることが示唆される。実際、海外の研究ではその関連は示されている。しかし、自尊感情を高めることで問題行動の抑制が望まれるとされる一方で、自尊感情が低い者が問題行動を起こしやすいわけではないことが報告されているなど、矛盾する結果が示されている (脇本, 2010)。このように、海外では矛盾する結果ではあるが、攻撃性と自尊感情の関連を検討した研究はある。しかし、日本国内では見当たらないため、本研究では攻撃性を愛着スタイルと自尊感情も交えて検討することを目的とする。愛着スタイルと攻撃性、愛着スタイルと自尊感情の関連の検討はこれまで多くの研究で行われてきたが、そのほとんどが現在、過去の愛着スタイルのどちらか一方のみを

扱ったものである。加藤 (1998) は、一般的な愛着理論で言われているように、愛着対象が変わったとしても、乳幼児期の愛着の質は青年期・成人期へと連続性があるのか、つまり愛着対象の異なる愛着スタイル間で、どの程度の一致度があるのかを検討する必要があるとしている。その意味でも、幼少期と成人期の愛着の一貫性を検討し、攻撃性と自尊感情に対する幼少期と青年期の愛着スタイルの影響力の差について検討することは意義があると考ええる。

先行研究の結果を基に、本研究では以下の点について検討する。(1) 攻撃性と自尊感情との関連、(2) 幼少期の愛着と成人期の愛着の一貫性、(3) 愛着スタイルと攻撃性、自尊感情との関連。そして (1) については、自尊感情が低いほど攻撃性は高くなると推測する。(2) については、幼少期の愛着スタイルが安定型である方が成人期の愛着スタイルも安定型となると推測する。(3) については、攻撃性、自尊感情ともに幼少期の愛着よりも成人期の愛着の方が影響力は大きいと推測する。

方 法

調査参加者

本研究の参加者は、関西学院大学に在籍している大学生の男性 40 名、女性 115 名、計 155 名であった。年齢範囲は 19~24 歳、平均年齢は 20.19 歳で、年齢の標準偏差は 1.06 であった。

指標

現在の愛着スタイルは、Bartholomew & Horowitz が開発し、加藤 (1998) が邦訳した「愛着スタイル尺度 (RQ)」を使用して測定した。この尺度は愛着対象に一般他者を想定した、現在の愛着スタイルを測定するものである。4 つの愛着スタイル尺度 (安定型、拒絶型、とらわれ型、おそれ型) の特徴を記述した 4 つの文章で構成されている。それぞれの特徴に自身があてはまる程度を「非常にあてはまる」~「全くあてはまらない」の 7 件法で回答を求めた。さらに先述の 4 つの愛着スタイルの中から、自分に最もあてはまると思うタイプを 1 つ選択させた。この尺度は加藤 (1998) によって構成概念妥当性が確認されている。

過去の愛着スタイルは、佐藤 (1993) が作成した「親への愛着尺度」を使用して測定した。この尺度は愛着対象に親を想定し、過去の愛着スタイルを測定するものである。安心・依存 (6 項目)、不信・拒否 (8 項目)、分離不安 (4 項目) の 3 つの下位尺度から成り、計 18 項目で構成されている。佐藤 (1993) にならい、「小学生だった頃」について、「あてはまる」~「あてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど、特性が強いことを表す。本研究での信頼性は、Cronbach の α 係数

が安心・依存で $\alpha = .87$, 不信・拒否で $\alpha = .87$, 分離不安で $\alpha = .70$ であった。

攻撃性は、安藤他 (1999) が作成した「日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙」を使用して測定した。全 22 項目であり、身体的攻撃 (6 項目)、短気 (5 項目)、敵意 (6 項目)、言語的攻撃 (5 項目) から成る。「まったくあてはまらない」～「非常によくあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど、特性が強いことを表す。この尺度は、安藤他 (1999) によって収束的・弁別的妥当性の確認がなされている。本研究での信頼性は、Cronbach の α 係数が全攻撃性で $\alpha = .82$, 身体的攻撃で $\alpha = .77$, 短気で $\alpha = .74$, 敵意で $\alpha = .80$, 言語的攻撃で $\alpha = .77$ であった。

自尊感情は、Rosenberg が開発し、山本・松井・山成 (1982) が作成した「自尊感情尺度の邦訳版」を使用して測定した。全 10 項目で構成されており、「あてはまる」～「あてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど自尊感情が高いことを表す。本研究での信頼性は、Cronbach の α 係数が .87 であった。

手続き

本調査は、発達心理学の授業時間の一部を使用し実施した。また、発達心理学を受講していない知り合いの学生にも参加を依頼した。質問紙の表紙には本調査は無記名で行い、統計的に処理するため個人が特定されることはないということ、本調査に参加しなかった場合も不利益が生じることはないことなどを記載し、参加者にはこれらに対する同意を得た上で回答を依頼した。

データの分析は HAD16 を用いて行った。愛着の 4 つのタイプのうち最も点数が高かったものと、選択したタイプが一致していなかった者が 13 名いた。仮説検証にはその 13 名を除いた、男性 36 名、女性 106 名、計 142 名を分析対象とした。また、各尺度の合計得点を項目数で割った平均値を各尺度得点とした。

結 果

攻撃性と自尊感情の性差

攻撃性尺度の全攻撃性得点と 4 つの下位尺度 (身体的攻撃、短気、敵意、言語的攻撃) 得点、自尊感情得点を算出した。その際、それぞれ得点が高いほどその特性が高いことを示すように逆転項目の処理をした。それぞれの平均値 (SD) は、全攻撃性は 2.77 (0.53)、身体的攻撃は 2.42 (0.83)、短気は 2.71 (0.83)、敵意は 3.07 (0.81)、言語的攻撃は 2.91 (0.83)、自尊感情は 2.93 (0.75) であった。

攻撃性と自尊感情の性差を調べるために、対応のない 2 つの平均値に関する等分散を仮定しない Welch の検定を行った。性別ごとの平均値と検定結果について Table

1 に示す。Table 1 に示されたように、全攻撃性、身体的攻撃、言語的攻撃において有意な男女差が見られ、いずれにおいても男性が女性よりも高かった。

攻撃性と自尊感情との関連

攻撃性と自尊感情との関連を調べるために、全攻撃性得点と自尊感情得点を用いて相関係数を算出したところ、有意な負の相関が示された ($r = -.24, p < .01$)。つまり、自尊感情が低いほど全攻撃性は高くなることがわかった。より詳細に検討するために、攻撃性に関する 4 つの下位尺度得点と自尊感情得点を用いて相関係数を算出したところ、自尊感情と短気 ($r = -.18, p < .05$)、敵意 ($r = -.55, p < .01$) との間には負の相関が、言語的攻撃 ($r = .30, p < .01$) との間には正の相関が示された。つまり、自尊感情が低いほど短気と敵意は高くなるが、言語的攻撃は低くなることがわかった。身体的攻撃と自尊感情の間には有意な相関は示されなかった。

幼少期の愛着と成人期の愛着間の一貫性

現在の愛着スタイルについて、安定型は 48 名で全体の 30.97%、拒絶型は 10 名で全体の 6.45%、とらわれ型は 44 名で全体の 28.39%、おそれ型は 40 名で全体の 25.81% であった。安定型が最も多く、とらわれ型、おそれ型と続き、拒絶型が最も少なかった。過去の愛着スタイルについて、算出した尺度得点を基に、安心・依存得点が最も高い者を安心・依存型、不信・拒否得点が最も高い者を不信・拒否型、分離不安得点が最も高い者を分離不安型とした。安心・依存型は 110 名で全体の 70.97%、不信・拒否型は 25 名で全体の 16.13%、分離不安型は 7 名で全体の 4.52% であった。安心・依存型が最も多く、次いで不信・拒否型、分離不安型は最も少なかった。

現在の愛着スタイルと過去の愛着スタイルの関連を調べるために、まず、それぞれの愛着を安定型と不安定型

Table 1 性別ごとの平均値 (SD) と検定結果

	性別	平均値 (SD)	t 値	p 値	d
全攻撃性	男性	2.95 (0.50)	2.39	0.02	0.44
	女性	2.72 (0.53)			
身体的攻撃	男性	2.82 (0.77)	3.64	<0.01	0.68
	女性	2.28 (0.80)			
短気	男性	2.68 (0.78)	-0.22	ns	-0.04
	女性	2.72 (0.84)			
敵意	男性	3.08 (0.70)	0.11	ns	0.02
	女性	3.07 (0.84)			
言語的攻撃	男性	3.20 (0.77)	2.56	0.01	0.47
	女性	2.81 (0.83)			
自尊感情	男性	3.00 (0.61)	0.75	ns	0.13
	女性	2.91 (0.79)			

に分類した。その結果、現在安定型群は48名で全体の30.97%、現在不安定型群は94名で全体の60.65%、過去安定型群は110名で全体の70.97%、過去不安定型群は32名で全体の20.65%であった。

次に、現在の愛着スタイルの分布に過去の愛着スタイルによる違いがあるかどうかを調べるために、独立性の検定を行った。現在・過去それぞれの愛着スタイル（安定型・不安定型）のクロス集計表をTable 2に示す。独立性の検定の結果、現在の愛着スタイルの分布には過去の愛着スタイルによる違いがあることが示された（ $\chi^2(1) = 7.19, p < .01$ ）。独立性の検定において違いが示されたため残差分析を行ったところ、現在安定型（ $p < .01$ ）は過去安定型で、現在不安定型（ $p < .01$ ）は過去不安定型でそれぞれ多かった。

愛着スタイルと自尊感情との関連

愛着スタイル群ごとの自尊感情の平均値（SD）は、現在安定型群は3.40（0.18）、現在不安定型群は2.67（0.08）、過去安定型群は3.06（0.07）、過去不安定型群は3.00（0.18）であった。

愛着スタイルと自尊感情の関連を調べるために、自尊感情を従属変数、現在の愛着スタイル（2）×過去の愛着スタイル（2）を独立変数とする被験者間分散分析を行

った。その結果、現在の愛着スタイルの主効果（ $F(1,138) = 14.84, p < .01, \eta^2 = .10$ ）は有意で、過去の愛着スタイルの主効果と両者の交互作用は有意ではなかった。現在の愛着スタイルの主効果に関するHolm法の多重比較を行ったところ、現在安定型群は現在不安定型群よりも自尊感情が高いことが示された（ $p < .01$ ）。

愛着スタイルと攻撃性との関連

愛着スタイルと攻撃性の関連を調べるために、攻撃性得点（4下位尺度得点を含む）を従属変数、現在の愛着スタイル（2）×過去の愛着スタイル（2）×性別（2）を独立変数とする被験者間分散分析を行った。身体的攻撃性について、性別の主効果（ $F(1,134) = 3.88, p < .10, \eta^2 = .03$ ）は有意傾向が示され、現在、過去の愛着スタイルの主効果、全ての交互作用は有意ではなかった。性別の主効果に関するHolm法の多重比較を行ったところ、男性と女性の間で有意な差は示されなかった。敵意について、現在の愛着スタイルの主効果（ $F(1,134) = 4.61, p = .03, \eta^2 = .03$ ）は有意で、過去の愛着スタイルの主効果と性別の主効果、全ての交互作用は有意ではなかった。現在の愛着スタイルの主効果に関するHolm法の多重比較を行ったところ、現在不安定型群は現在安定型群よりも敵意が高いことが示された（ $p = .03$ ）。言語的攻撃性について、性別と現在の愛着スタイルの交互作用（ $F(1,134) = 2.82, p = .10, \eta^2 = .02$ ）と、現在の愛着スタイルと過去の愛着スタイルの交互作用（ $F(1,134) = 3.19, p = .08, \eta^2 = .02$ ）は有意傾向が示された。下位検定の結果、男性参加者における現在の愛着スタイルと過去の愛着スタイルの交互作用（ $F(1,134) = 3.62, p = .06, \eta^2 = .10$ ）が有意傾向となり、男性の現在安定型群にお

Table 2 現在の愛着スタイルと過去の愛着スタイルのクロス集計表

	過去安定型	過去不安定型	合計
現在安定型	44	4	48
現在不安定型	66	28	94
合計	110	32	142

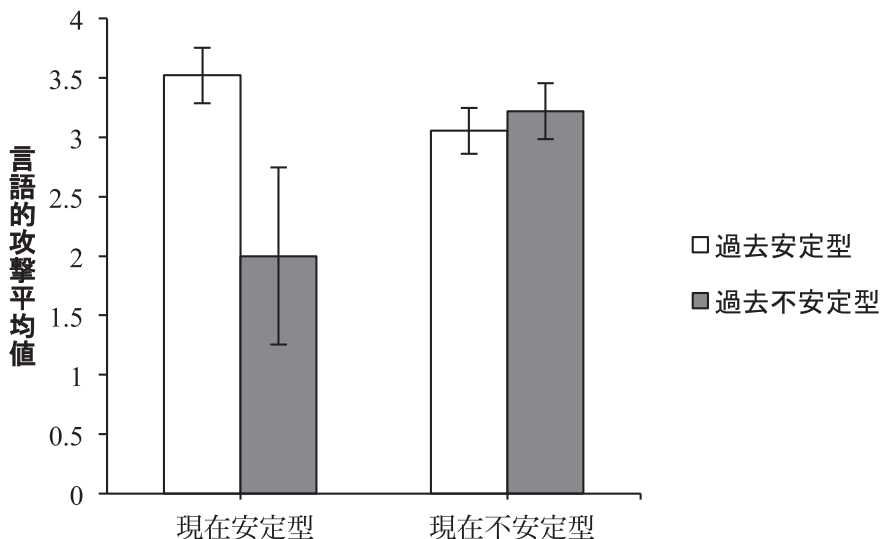


Figure 1 男性の現在・過去の愛着別言語的攻撃平均値。エラーバーは標準誤差を表している。

Table 3 男性の愛着スタイル群別攻撃性平均値 (SD)

	全攻撃性	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃
現在安定型群	3.01 (0.58)	2.92 (0.66)	2.56 (0.72)	3.15 (0.60)	3.38 (0.90)
現在不安定型群	2.92 (0.47)	2.78 (0.82)	2.74 (0.81)	3.05 (0.75)	3.12 (0.71)
過去安定型群	2.94 (0.49)	2.83 (0.69)	2.61 (0.73)	3.09 (0.59)	3.24 (0.78)
過去不安定型群	2.96 (0.54)	2.80 (0.97)	2.86 (0.89)	3.08 (0.95)	3.11 (0.78)

Table 4 女性の愛着スタイル群別攻撃性平均値 (SD)

	全攻撃性	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃
現在安定型群	2.62 (0.54)	2.23 (0.76)	2.61 (0.73)	2.56 (0.76)	3.16 (0.75)
現在不安定型群	2.77 (0.52)	2.30 (0.83)	2.78 (0.90)	3.34 (0.76)	2.63 (0.82)
過去安定型群	2.67 (0.55)	2.24 (0.80)	2.64 (0.83)	2.98 (0.83)	2.82 (0.84)
過去不安定型群	2.92 (0.42)	2.43 (0.80)	3.05 (0.85)	3.41 (0.83)	2.78 (0.82)

る過去安定型 ($M=3.52$, $SD=0.24$) は過去不安定型 ($M=2.00$, $SD=0.75$) よりも言語的攻撃が高かった。Figure 1 に男性の現在・過去の愛着別言語的攻撃の平均値と標準誤差を示した。Figure 1 からは、現在と過去の愛着スタイルが一貫して安定型である方が、言語的攻撃は高いことが分かる。また、女性における現在の愛着スタイルの単純主効果 ($F(1,134)=3.49$, $p=.06$, $\eta^2=.03$) は有意傾向が示されたが、現在安定型 ($M=3.15$, $SD=0.24$) と過去安定型 ($M=2.66$, $SD=0.11$) との間で有意な差は示されなかった。全攻撃性、短気について、現在、過去の愛着スタイル、性別の主効果と全ての交互作用は有意ではなかった。男女別の愛着スタイル別攻撃性 (各下位尺度を含む) の平均値 (SD) を Table 3 と Table 4 に示す。

考 察

本研究の目的は、大学生の攻撃性と愛着スタイル、自尊感情の関連を検討するとともに、異なる愛着対象間の愛着スタイルの一致度について検討することであった。そのために質問紙調査を実施し、(1) 攻撃性と自尊感情との関連、(2) 幼少期の愛着と成人期の愛着間の一貫性、(3) 愛着スタイルと攻撃性、自尊感情との関連、について検討した。

最初に、攻撃性と自尊感情の性差について考察する。攻撃性の性差について、直接的に表出される全攻撃性、身体的攻撃、言語的攻撃は女性よりも男性の方が有意に高いことが示された。また、表出が直接的でない短気、敵意について有意差は示されなかった。秦 (1990) は、顕在的な攻撃は男性の方が高く、いらいは女性の方が高いこと、言語的攻撃と敵意は有意差が見られなかったことを報告している。これは本研究で示された全攻撃性、身体的攻撃、敵意の性差の結果と一致する。短気は有意差には至らなかったものの、男性よりも女性の方が高かった。有意差に至らなかった原因として、使用した尺度による影響が考えられる。秦 (1990) は対象に苦痛

を与えることが主な目的である敵意的攻撃として攻撃を捉えていたが、本研究で攻撃性の測定に使用した安藤ら (1999) の尺度では対象に苦痛を与えること以外の目的を達成しようとする道具的側面からも攻撃を捉えている。言語的攻撃については、海外の研究ではその性差について一貫した結果が得られていない (秦, 1990)。言語的攻撃について女性よりも男性の方が高いという本研究と同様の報告をしている岡田・桂田 (2013) は、言語的攻撃の項目は自己主張と関連したものが多く、言語的攻撃というよりも自己主張を測定している可能性があり、慎重に検討する必要があるとしている。本研究の言語的攻撃の項目も、「自分の権利は遠慮しないで主張する」など、自己主張に関連したものが多くあったため、本研究の結果も男性の方が自己主張を良くするという結果を示している可能性が推測される。

自尊感情の性差について、本研究では有意差は示されなかった。日本人における自尊感情の性差について検討した岡田他 (2015) では、自尊感情の性差に年齢の影響が確認され、中学生から成人にかけて性差が小さくなることを報告している。本研究の参加者は大学生であったため、自尊感情の性差が示されなかったと考える。

続いて攻撃性と自尊感情、愛着スタイルそれぞれの関連について考察する。攻撃性と自尊感情の関連について、自尊感情と全攻撃性の間で有意な負の相関が示された。この結果から自尊感情が低いほど攻撃性は高くなるということが認められ、自尊感情が低いほど攻撃性は高くなるという推測は支持された。自己に向けられる完全主義である自己志向的完全主義と攻撃性との関連について検討した齋藤・沢崎・今野 (2008) は、抱いた欲求不満が攻撃性として表出されるという欲求不満-攻撃仮説を用いて、自己志向的完全主義者が持つ攻撃性について説明している。本研究の結果についても、自己に対する価値の評価である自尊感情の低さから、欲求不満に陥りやすく、それが攻撃性として表出されたと考えられる。あるいは、人はネガティブな気分状態にある時、ネガティブ

な判断や行動をとる傾向があるという、海外で提唱された気分一致効果（神田，2007）の考え方から、自己に対する否定的なイメージが攻撃性を促進しているとも説明できるだろう。しかし、自尊感情と攻撃性に関する4つの下位尺度（身体的攻撃、短気、敵意、言語的攻撃）との関連については、自尊感情と短気、敵意との間では有意な負の相関が示されたが、自尊感情と言語的攻撃との間では有意な正の相関が示され、自尊感情と身体的攻撃との間では有意な相関が示されなかった。児童の攻撃性と性格特性との関連について研究した曾我・島井・大竹（2002）は、何事にも自信があり、落ち込みにくい傾向を持つ人ほど言語的攻撃が高くなるという、本研究の結果と類似した内容の報告をしている。また曾我ら（2002）は、言語的攻撃は表出に際して、自己統制の影響を受けてより適応的な行動として表出される傾向があるという報告もしている。先述したように、本研究で使用した尺度の言語的攻撃に関しては、言語的攻撃と言うよりも自己主張に近いものであり、他の攻撃性に比べ適応的な内容であるように思われる。だが実際には、言語的攻撃には暴言のような不適応的なものも存在するはずなので、言語的攻撃の不適応的側面にも焦点を当てた検討が必要であると考え。自尊感情と身体的攻撃との間に有意な関連が示されなかったことについては、研究対象が大学生であったことが影響していると推測する。岡田・桂田（2013）は大学生について、人としての社会的適応を求められる青年期にあたりと説明しており、本研究では直接的に表出される不適応行動である身体的攻撃は抑えられたため関連が示されなかった可能性がある。そのため、研究対象を特定の世代に限定せず、幅広い年齢層を対象とした研究での検討が必要であると考え。

幼少期の愛着と成人期の愛着間の一貫性について、現在安定型は過去安定型で、現在不安定型は過去不安定型でそれぞれ多かった。この結果から、幼少期の愛着スタイルが安定型である方が成人期の愛着スタイルも安定型となることが認められ、幼少期の愛着スタイルが安定型である方が成人期の愛着スタイルも安定型となるという推測は支持された。これは乳幼児期の愛着の質は青年期・成人期へと連続性があるとする一般的な愛着理論で説明でき、大学生においても親との関係は重要であるという桂田（2009）の報告と合致するものである。本研究の結果から、愛着対象の異なる愛着スタイル間で、どの程度の一致度があるのかを検討する必要があるという加藤（1998）の課題に対して、愛着スタイルを安定・不安定で見た場合、小学生時の親への愛着と大学生の一般他者への愛着にある程度一貫性があるという答を提示できた。しかし、小学生時の愛着スタイルは現在の回顧的評価であることを断っておかねばならない。

愛着スタイルと自尊感情との関連について、現在の愛

着スタイルの有意な主効果が見られ、現在安定型群は現在不安定型群よりも自尊感情が高いことが示された。愛着スタイルと自己イメージの関連について検討した田附（2015）も、同様の報告をしている。自己イメージとは、内的作業モデルや自己観のような無意識的なものから生じる、自己に関する意識的な表象のことである（田附，2015）。田附（2015）は、愛着スタイルが安定型の人々が持つ自己イメージにおいて、否定的な性格の認知がされにくく、社会の中での自分の役割を重視し、自分の社会活動を肯定的に捉えることを特徴として挙げている。したがって、安定型の愛着スタイルを持つ人は、自分に自信があり、積極的に社会に関わることが可能で、その活動は成功体験として自身に蓄積されていくため、不安定型に比べて自尊感情が高いと推測する。

愛着スタイルと攻撃性との関連について、敵意や女性の言語的攻撃では、現在の愛着スタイルの有意なあるいは有意傾向の主効果が見られた。しかし、愛着スタイルと攻撃性との関連について、過去の愛着スタイルの主効果はひとつも示されなかった。また、自尊感情においても、過去の愛着スタイルの主効果は見られなかった。これらの結果から攻撃性、自尊感情ともに幼少期の愛着よりも成人期の愛着の方が影響力は大きいという推測は概ね支持された。本研究で示されたように、幼少期と成人期の愛着にはある程度一貫性はあるものの、愛着に関する作業モデルは、後の経験に基づいて常に再構築されるものであることが海外の研究で示されている（佐藤，1993）。そのため、自身の経験によって変化を遂げ、今現在構築している愛着の方が現在の攻撃性と自尊感情に対して大きな影響力を持つという結果は納得のいくものである。しかし、男性の参加者においては、現在・過去の愛着スタイルが一貫して安定している方が言語的攻撃は高いことも本研究では示されたため、幼少期の愛着スタイルが持つ影響力については慎重に吟味する必要があるだろう。

攻撃性と自尊感情との直接的な関連について検討し、その関連を明らかにできたことは、攻撃性を明らかにするうえで意義があったと考える。しかし、本研究の限界に、愛着スタイルを安定・不安定型という単純な分類にしてしまっていることが挙げられる。工藤（2006）は愛着のおそれ型は他者との関係や自己の防衛のために攻撃性を抑圧するが、きっかけがあれば激しい攻撃性を表出するという。このような個々の愛着スタイルと攻撃性の関連は攻撃性のメカニズムを明らかにする上で重要なことである。本研究では、人間の適応という視点から、愛着も安定型と不安定型に分けたが、攻撃性の解明という視点からは、より詳細な愛着スタイルと多様な攻撃性との関連を検討することが今後の課題である。

引用文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・坂井明子 (1999). 日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70(5), 384-392.
- 秦 一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, 61, 227-234.
- 神田信彦 (2007). 原因帰属と気分・感情の関係の検討 人間科学研究, 29, 61-67.
- 加藤和生 (1998). Bartholomew らの4分類愛着スタイル尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, 7, 41-50.
- 桂田恵美子 (2009). 大学生の愛情の枠組みと自尊感情・対人信頼感との関係 人文論究, 59(2), 30-41.
- 今野義孝・吉川延代 (2016). 愛着スタイルと自尊感情との関連性—身体感覚への態度, マインドフルネス, 反すう, レジリエンスの媒介効果— 人間科学研究, 38, 137-148.
- 工藤晋平 (2006). おそれ型の愛着スタイルにおける攻撃性の抑圧—P-F スタディを用いた検討— パーソナリティ研究, 14, 161-170.
- 岡田博名・桂田恵美子 (2013). なぜ人は攻撃するのか—攻撃性と愛着スタイル及び防衛機制との関連— 関西学院大学心理科学研究, 39, 37-42.
- 岡田 涼・小塩真司・茂垣まどか・脇田貴文・並川努 (2015). 日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析 パーソナリティ研究, 24, 49-60.
- 尾崎康子・杉本宜子 (2007). 青年期における愛着と攻撃性との関連 富山大学人間発達科学部紀要, 2, 37-45.
- 齋藤路子・沢崎達夫・今野裕之 (2008). 自己志向の完全主義と攻撃性および自己への攻撃性の関連の検討—抑うつ, ネガティブな反すうを媒介として— パーソナリティ研究, 17(1), 60-71.
- 佐藤朗子 (1993). 青年の対人的構えと親および親以外への愛着の関連 名古屋大学教育学部紀要, 40, 215-226.
- 島 義弘 (2014). 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか—内的作業モデルの媒介効果— 発達心理学研究, 25, 260-267.
- 曾我祥子・島井哲志・大竹恵子 (2002). 児童の攻撃性と性格特性との関係の分析 心理学研究, 73(4), 358-365.
- 田附紘平 (2015). アタッチメントスタイルと自己イメージの関連—20 答法による探索的検討— パーソナリティ研究, 23(3), 180-192.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 脇本竜太郎 (2010). 自尊心の高低・不安定性の2側面と達成動機の関連 パーソナリティ研究, 18(2), 117-128.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.